
聖剣伝説—善悪の彼岸— 珠魅編

Sabert

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖剣伝説―善悪の彼岸― 珠魅編

【Nコード】

N4204Q

【作者名】

S a b e r t

【あらすじ】

私を思い出してください。

私を求めてください。

私は全てを限りなく与えます。

私は『愛』です。

私を見つけ、私へと歩いてください。

聖剣伝説レジェンド・オブ・マナの二次創作。主人公、女主人公はオリジナルキャラクター。そのほかオリジナルキャラクターほとんど登場しません。

プロローグ（前書き）

至らない面もございますが、どうぞ最後までお付き合いください^^
完結まで走りきます!!!!

プロローグ

マナの木が焼け落ちたのが900年前。
マナの力は、魔法楽器やマナストーン、
アーティファクトの中にだけ残され、
知恵あるものたちはそれを奪い合いました。

そして数百年に渡る戦乱の時代を経て、
マナの力が少しずつ弱まるにつれ、
それを求める者たちも消えてゆくと、
ようやく、世界に平和が訪れました。

それ以来、人々は求めることを恐れ、
虚ろな気持ちだけを胸に抱いて、
私の手から離れて行きました。
私の無限の業から目を背け、
小さな争いに胸を痛めています。

私を思い出してください。

私を求めてください。

私は全てを限りなく与えます。

私は『愛』です。

私を見つめ、私へと歩いてください。

まいごのプリンセス 1 （前書き）

聖剣伝説L O Mをご存知ない方のためのご説明。

お話は最初の町、ドミナからはじまります。

ドミナの町は、片田舎の緑豊かなそこそこ活気のある町です。

町の仲間達のこと追々作中でご紹介することになると思います。

楽しく愉快的な町の仲間達のことを知ってもらえるような第一話にしたいですね。

まいこのプリンセス 1

1

「おい、その女」

私は失礼な呼び方をされて振り向き、後ろにいた男を見た。

流砂のマントを着たその男は、剣を帯びていた。旅の途中だろうか。まあ、私も常に槍を持っているが、旅はしていない。用心棒稼業に必要なから持っているまでだ。男の胸には珠魅^{ジュミ}の証、『核』があった。核とは、珠魅という種族における、心臓にあたる器官で、見た目は宝石でできた玉だ。その男の核は、深い青に金色の点がいくつもある。男はラピスラズリの珠魅だった。

「何か用ですか？」

私は、その男の剣呑な雰囲気^{フウキ}に危険を感じ、相手を刺激しないように気をつけて訊いた。

「仲間を探している」

「珠魅のお仲間ですか？」

「あたりまえだ」

この男の言葉に少々カチンと来た。こっちは丁寧に対応してるのに、なんなのこの態度のでかさ。

「それで、どんな方を探しているんですか？特徴とか・・・」

「ああ、白いドレスに、長く編んだ髪をたらしめている。

妹みたいなものなんだが・・・」

心配だ・・・」

そんな珠魅には見覚えがない。

「わかりません。お役に立てなくてすいません」

「チツ・・・時間を無駄にした」

駄目だ。やっぱり我慢できない。その男が去って行くのをただ見ているだけではあまりにも腹が立つから、私は男の背中に叫んだ。

「名前くらい名乗ったら!？」

「瑠璃だ」

男は一度だけ振り返って名乗った。そして、酒場に入っただけで、私はさらに怒りをぶつけてやろうと、酒場に駆け込もうとした。しかし、中から入れ違いに出てきた、ウサギ耳のデブ猫の商人、二キータに邪魔された。

「アリチエさん、ちょっと退いてくれにや。譲り合うのが人の道にや」

「そう思うなら自分が退きなさいよ!」

二キータに当り散らした。

「何かあったのかにや。わかったから、早く行ってくれにや。耳元で叫ばれちゃ、うるさくてかなわないにや」

私は二キータを退けると、酒場の中に入った。

あの男の姿は探すまでもなかった。酒場のウェイトレスのレイチエルに絡んでいる。

それに、もう一人の男が、横でなにやら珠魅の男、瑠璃に尋ねているようだ。

「どうしたんだ？」

「仲間を探している。白いドレスに、長く編んだ髪をたらしめている女の子を見なかったか？」

「いや、わからんな」

瑠璃は、ウェイトレスに向き直った。

「おい、女、答える。さもないと……」

ここで、私の理性は飛んだ。

「おい、こっち向けこのスカーフタン!」

瑠璃は、私を睨んだ。

「キサマに用事はない。そこで黙っている」

「『キサマ』じゃない、アリチエって名前がある。それに、お前になくてもこっちには用がある。その子に謝れ」

「ウルサイ、今取り込み中だ。キサマには関係ない」

「これ以上その子に怖い思いさせるなら、こつちも実力行使といこうじゃないか」

そこで、さつき瑠璃に話しかけていた男が、私と瑠璃の間に入った。

「まあ、待てよ」

「何？」

私が槍の穂先を向けると、後ずさって両手を挙げた。

今まで理性がキレていて、眼中になかったが、その男を初めてしっかりと見た。男は黒髪黒瞳。肌の色は、シナモン色のように見える。もはや何色かわからないような、汚くてぼろぼろなマントを羽織っている。大剣を背負い、ガツシリとして、背が高い。

「落ち着け、この珠魅の彼にだって事情はある」

む、もつともなことを言う。しかし、このドミナの町での蛮行をこれ以上許すわけには行かない。

「俺は、彼の仲間を探す」

男は、瑠璃のほうを振り返った。

「だが、オレ達にかかると……」

「わかつている。俺も、珠魅の友達をさがしているんだ。だから、手伝わせてほしい。……それなら、このウェイトレスに詰め寄ることもないだろう？」

「そうだな。ありがとう。助かるよ！それで、アンタの名は？」

「俺はラムだ。帝国から来た」

瑠璃はさっきの剣幕が嘘のように嬉しそうだ。探している珠魅の女の子がよほど大切と見える。

「あの、これを……」

ウェイトレスのレイチエルは、何かを瑠璃に差し出した。

それは、卵の形をしたヒスイだった。

「これは……真珠姫の香りがする……急ごう！」

瑠璃は酒場を出ようとした。

「ちよい待ち！」

私は、瑠璃の前に立った。

「どこへ急ぐつもり？」

そう言つと、

「アリチエとか言つたか。アンタに居所がわかるのか？」
と言つた。

「私にはまだわからない。だけど、私の情報網を甘く見ないことね」
「手伝つてくれるのか？」

「キレイなワビをするつもりはないけど、探しているのは、あなたの大切な人なんでしょう？ 私は『ドミナのお節介アリチエ』とも呼ばれてるの。人のお節介は好きだから、人探しのお手伝いをさせてもらうわ」

瑠璃は、わかつた、と大きく頷いた。

まいごのプリンセス 1 （後書き）

聖剣伝説LOMをご存知ない方のためのご説明。

珠魅とか、ニキータとか、知らない人にはなんのこっちゃですよ、ね、わかります。

珠魅のことは、この 珠魅編 でメインとなるので、ご期待ください。

ニキータは今後あまり活躍できません。原作でのイベントは全カットの方向です。

そのかわりといっちゃ難ですが、ちょっとした役割を演じてもらうことにしましょう！

まいごのプリンセス 2

「誰に訊くのか目星はついているのか？」

ラムは私に訊いた。

「まあ、こういうのはまず、プロに聞くのよ、プロフェッショナルに」

「プロフェッショナル？こんな田舎に人探しのプロがいるのか？」

瑠璃はいぶかしげに言った。

「まあ、アテになるかはともかく、プロには間違いないわ」

あの人は教会の前にいたはず。

ほら、いた。あのピンクと緑の帽子とコートの小さなオジサン、

ボイド警部。

「オイ、チミ、その後ろの砂マントのチミだよ！

チミはなんでもストーカーをやってるって、たいそうすこぶる評判が悪いそうじゃないか！」

ボイド警部はいつものカン高い大声でしゃべった。

「評判の悪い男を探すのが、お前の仕事か？」

瑠璃が冷たく睨んだ。

「いや、そうじゃ……ない。そうじゃないんだが……そういうのはよくないじゃないか、町のチアンがだね、わからんかチミ」

「わからん」

「うむ、そうか、行ってよし！今度はするなよ！」

ボイド警部は、力の弱いものには強い態度で出るけど、相手が強いと見るや、急に態度を翻すへたれだ。

私は面白いので黙って見ていた。

瑠璃はさらにボイド警部を睨みつけた。

「チミイ、仕事のジャマよ！！」

怖い目で見ちゃイヤッ！！本官はボイド警部ッ！」

「わかってますよ、ボイド警部」

私は笑いを堪えて言った。

「この人、本当に役に立つのか………？」

ラムが私に囁いた。

「さあ、どうかしら。とにかく、ボイド警部、白いドレスに、長く編んだ髪をたらしした珠魅の女の子を見ませんでしたか？」

「ん、チミたちまでストーカーを始めたのか？イカンぞ」

「知ってるのか知らないのか、それだけしゃべれば十分だ」

瑠璃は、ボイド警官にゆつくりと近寄った。

「だから、怖い目で見ちゃイヤッ！！」

本官は知らない！！フルーツ占いのお姉ちゃんにでも訊いたらどうかね！？」

「フルーツ占い？」

ラムが不思議そうに言った。

「そうね。困ったときのフルーツ占い。バザールに行きましょう」

フルーツ占いは、ときどき当たる、フルーツを使った占いだ。

バザールの髪の毛がブドウみたいなお姉さんがやっている。たぶん、世界でもドミナでしかできない占いだと思う。

私は、そのことを二人に説明しながら、バザールに急いだ。

お姉さんに占いを頼んだ。老後は一人でやっていくそうだ。どうでもいい。

「ビタミン カロチン カリウム ファイバー ポリフェノールッ
！」

と言いながらお姉さんはフルーツが入ったバスケットの中で回り、フルーツも回る。そして、その回転が終わったあと、お姉さんが目の前のりんごをかけた。

「んー、これは。引越し先で新しい恋の予感、です」

お姉さんは、私たちのがっかりした様子を見て、

「ま、まあ、元気だしなよ！引越しができなくなっただって、恋はどこにでもころがっているのよ！」

と言った。お姉さん、そこじゃないです。

私たちは、町の行く先々で人に聞いて回ったが、どうにも手がかりはみつかりそうになかった。

「あとは、役に立たない草人くらいだな、まだ訊いていないのは」
瑠璃は、ため息をついた。

「草人が……！！」

ラムは、何かひらめいたように、近くの草人に近寄った。

「どうしたの？」

私が訊くとラムは、

「草人には、一つ特性がある。草人同士、テレパシーがあるんだ。

草人は、別々に生きているように見えて、すべてつながっているんだ」

と言った。

「そうだったの？初めて聞いた」

「オレも初耳だ」

「まあ、師の受け売りだがな」

っていうことは、もし人を探したいなら、いろんなところにいる草人からテレパシーで情報を集めればいいってことね！

瑠璃もそれに気がついたようだった。

「さっそく話しかけてみる」

瑠璃はそう言ったけど、私は止めた。なぜなら、瑠璃では目つきが悪すぎて草人が逃げてしまいそうだったからだ。

「私が話しかけてみる」

「わかった。頼む」

草人はすぐにみつかった。どこにでもいるからね。

草人の姿は、緑の葉っぱに埋もれた小さな子供ってかんじ。とて

も愛らしくて、町の人たちにも愛されている。

「ねえ、草人さん、お話しない？」

「うん いいよ ココロがあるひとはみんなどこかにいっちゃうんだよね。」

ボクラ、ココロ ないからどこへもいかないんだって 詩人のボキールがいつてたの」

「そうなの？ じゃあ、ココロのある白い服の女の子はどこへ行っ
たか知らない？」

「ほかのボクがね しろいおんなのこをみたよ」

「え！？ ほんとうに？ どこにいるの？」

「なんだかぴちゃぴちゃ みずがきもちよくてね まっくらなの」
後ろで、瑠璃が「そうか！」と言った。

「どうしたんだ？」

ラムが訊いた。

「洞窟だ。このヒスイは洞窟で採れたんだ。そして、真珠姫は洞窟
にいる。だから、このヒスイから真珠姫の香りがするんだ！」

瑠璃は、興奮した様子で言った。

「なるほど、洞窟ね。それならメキブが一番近いわ。メキブの洞窟
に急ぎましょう！ありがとう、草人さん」

「おおきな おさるさんに きをつけてね」

私たちは、草人の声を聞き流して、メキブの洞窟に急いだ。

まいごのプリンス 2 (後書き)

草人は本当に可愛らしいので、ご存知ない方は「聖剣伝説 草人」で画像検索してみてください！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4204q/>

聖剣伝説—善悪の彼岸— 珠魅編

2011年1月26日14時55分発行